

# 文 國 大 女 子

第四百一十一号

平成十九年九月発行

六角堂縁起と池坊いけばな縁起……………	中前正志(一)
——古代寺院縁起の近世近現代的展開——	
古代語の副詞「よく」の「十分に」 とされる意味用法について……………	井上博嗣(七)
京都近世開帳記録(二)……………	八木意知男(九)
——『日次紀事』・『在京日記』等における——	
彙報……………	(一〇六)

# 彙報

## 国文学会行事

○新入生オリエンテーション

四月五日(木) 午後三時～ B501

○優秀論文発表会

四月二十八日(土)

〔学部〕

「貝の火」―その由来と成立の背景― 澤井 麻妃子氏

椋文学における〈死〉の描写 梶村 真帆氏

「やるせない」考―明治以降現代における意味・用法―

廣政 愛氏

〔大学院〕

司馬史観の空隙―『坂の上の雲』からみる―

高橋 小百合氏

○新入生歓迎行事「狂言鑑賞会」

六月二十三日(土) 午後一時～午後二時三十分

会場 音楽棟二階演奏ホール

演者 茂山千三郎先生 茂山宗彦先生 茂山童司先生

松本薫先生 鈴木実先生

プログラム 解説・「附子」・「神鳴」

○春季公開講座

五月二十五日(金)

講題 西鶴も人情を道う

講師 奈良女子大学名誉教授 井口 洋先生

## 研究室だより

○本年三月末日をもって、小林賢次先生が早稲田大学へお移りになられました。二年間、国語学のご指導ありがとうございました。今後のますますのご活躍とご健勝をお祈りいたします。

○本年四月より、新しいスタッフとして、湯沢質幸教授(国語学)、普賢保之教授(仏教学)をお迎えすることができました。なお、両先生からいただいたご挨拶を本号に掲載しています。併せてお読み下さい。

○昨年度一年間、京都大学において内地研修されていた峯村至津子先生が、この四月よりお戻りになりました。研修の成果を踏まえ、教育・研究にますますの充実を期しております。

○本年度の国文学科の主任は中前先生で、工藤哲夫・峯村至津子の両先生とともに、学科・国文学会の運営にあたっておられま

す。

○本年三月をもって、事務担当の江藤朋子さんが退職なされました。一年という短い間でしたが、いろいろと研究室事務のシテム化を進めていただき、円滑な事務運営ができるようになりました。今後のご活躍をお祈りいたします。

○四月より事務担当として、津田川麻衣さんが着任され、教員・学生のお世話をしてくださっています。

## 二 挨拶

湯 沢 質 幸

今年四月に着任しました。これまで山形大学に十二年、筑波大学に二十一年勤めてきました。故郷は群馬で、空っ風のまさにど真ん中で生まれ育ちました。京女ではまだ五里霧中の状態ですが、私なりに力を尽くしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

専門は国語学です。国語史、特に音韻史を中心として研究を進めてきました。中国語との比較における国語音声音韻の歴史の解明を出発点としましたが、ここでの中国語とは漢字の音にほかな

りません。その結果、日本における漢字の音の研究が、その後の主要なテーマとなりました。

用いる資料は、主として、漢字の音がたくさん載せられているものか、漢字の音についての説明があるものかになります。それで、これまで多く仏典や漢籍、古辞書などを見てきました。真宗関係の仏典の調査をしたこともあり、また京女には漢詩を作るための参考書(韻書)の調査にうかがったこともあります。何十年前前のことで、私もまだ二十代の院生でした。

ここ数年、やっといくらか研究を楽しめるようになってきました。今は日本における漢字や漢文などの受容を、朝鮮半島におけるそれと比べたり、文化史的な背景などを考慮したりしながら明らかにすることを目指しています。できれば、その内一冊にまとめたと思っています。

京都では、鴨川や東山の景色の移り変わりを楽しみながら、あちこち歩き回っています。赴任するまで何十回か来ていたので、それなりに京都のことを知っているつもりでしたが、歩きたびに(実は何も見ていないし知ってもいなかったのだ)ということを感じさせられています。

京女の学生の皆さんや先生方は勉強に研究に一途。私は今京女で、新たなエネルギーをいただいている最中です。京女所蔵の貴

重書の調査も楽しみの一つです。赴任して三ヶ月近くが立ちました。あれやこれや、改めて京女に迎えていただけただけのことをうれしく思っています。

なお、筑波大学では、ずっと日本語教育や留学生のことに携わってきました。この方面に関心のある方には、何かお役に立てる所があるかもしれません。

## 二 挨拶

普賢保之

四月に仏教学担当の教授として着任いたしました。前任校は龍谷大学です。京都女子大学には以前から非常勤講師としてお世話になっていました。京都女子大学は伝統のある大学であり、学生も真面目でやり甲斐を感じています。

自宅は滋賀県彦根市にあります。大学までは電車とバスで通勤しています。三月までは京都市内でマンション暮らしをしていました。京女に移ったのを契機に、四月からは往復二時間余りかけて彦根から通勤しています。当初はこの通勤時間を持て余すのではないかと危惧していましたが、それは杞憂でした。好きな本が

読める貴重な時間になっています。

現在は彦根に住んでいますが生まれは大分県宇佐市です。実家の近くには八幡宮の総本社である宇佐八幡宮があります。実家はその宇佐八幡宮から車で十五分程山手に入ったところにあります。日本昔話に出てくるような風景が広がっています。小さい頃は山を駆けめぐり、川で魚を手づかみしたりして遊んでいました。外で遊ぶこと大好きで、読書家で優等生の兄とは対照的でした。小学生の頃は野球に、中学生になってからは相撲に明け暮れていました。今の私の体型からは、相撲をしていたとは想像しにくいかも知れませんが、県大会の団体戦で準優勝したこともあります。

若い頃は方向が定まらず随分と寄り道をしました。紆余曲折を経て仏教学（親鸞）に出会い、漸く自分の進むみちを見いだしたように思います。専門は親鸞ですが、親鸞以後親鸞の説くところがどのように継承されていったかというところにも関心を持っています。

一般的には仏教といえば、「死」とか「葬式」をイメージする人が多いと思います。確かに僧侶は葬儀を執行し仏教は死を問題にします。しかし仏教が死を問題にするのは、今のこの生を問題にしているからなのです。それは仏教は限られた人生を如何に幸

せに生きるかを問題にしているということでもあるのです。

仏教の面白味を少しでも多くの学生さんに分かってもらえたら  
と思っています。どうぞ宜しくお願いいたします。

### 二〇〇六年度博士(文学) 学位論文題目

現代日本語における時の副詞の研究

金 英児

古今的表現の成立と展開

岩井宏子

### 二〇〇六年度修士論文題目

司馬史観の空隙——『坂の上の雲』からみる——

高橋小百合

女性の「自立」の可能性——宮尾登美子の自伝的小説の世界——

中川由利子

『今とりかへばや物語』の構想と方法

藤野智子

中世における「は」と「が」の機能

小川優子

釈経歌にみえる「さはりの雲」

中村麻子

### 二〇〇六年度卒業論文題目

古 代

「宮人」考—宮人と大宮人—

— 村 晶 代

伊勢集諸本考

池 田 亜弥子

『万葉集』における男性呼称

泉 井 麻有美

人麻呂挽歌における鳥

斉 藤 雅 子

額田王小考

中 西 智 香

長明作歌活動考—千載集九三六番歌をめぐって—

中 山 翔 子

人麻呂作歌にみる敬避表現

長 森 有 紀

歌語「天雲」について—『万葉集』における—

山 本 菜 穂

飛鳥川と紅葉

北 尾 鮎 香

『新古今和歌集』五一八番歌稿—「衣かたしき」をめぐって—

島 田 起理子

『大鏡』における花山院—『栄花物語』にふれて—

吉 田 知 世

柏木の死が意味するもの

我 孫 子 み む

桐壺更衣人物像—「桐壺」巻における再検討—

石 津 文 子

『源氏物語』における夢と物の怪をめぐって

市 木 めぐみ

「落窪物語」の道頼の成功—落窪の君再生の意図—

上 田 真由美

『とりかへばや物語』の国母伝について

—きょうだいの行動の比較から—

大 谷 由香里

六条御息所の生霊 『源氏物語』「葵巻」より

片 山 寛 子

『蜻蛉日記』養女と裳着

紫の上と梅花香

葵の上の死の意義―源氏物語における「母親」像―

浮舟の出家―浮舟の心情の変化を中心に―

描かれない別れ―『更級日記』の父と娘―

『伊勢物語』の享受変遷―実在の業平と「をとこ」のつながり―

秋好中宮腰結役構想論

『はいずみ』前半部の果たした役割

清少納言の自讃意識―『枕草子』における―

末摘花と光源氏の恋愛

須磨の絵日記の役割―『源氏物語』絵合の形式―

### 中 世

『木幡狐』後日譚の成立―弘法大師を中心に―

石山本願寺寺内町における本願寺と町衆の関係

―年中行事を中心に―

延慶本『平家物語』に描かれる平頼盛像

狐の強力という能力―『日本霊異記』第二縁より―

『平家物語』における「小督」の意味・役割

渋川版『酒吞童子』―鬼の背負っているもの―

小和田 佳織

塩崎 有紀

城 内里実

高橋 知子

南 荘恵美

増本 幸恵

山 内彩未

百合野 智子

石 原優子

小 門万希子

宮 村麻矢

磯 田純子

近 藤美奈子

竹 中千尋

竹 林梨紗

西 尾美紗子

林 田優

『仙人女犯譚』の展開―久米仙人説話と一角仙人説話から―

説話に生きる小町―小町鬮傳説を中心に―

謡曲「三山」におけるうわなり打ちの意義

―桂子の人物像について―

浦島伝説における亀の存在

李夫人における故事から文学への展開―反魂香を中心に―

### 近 世

『世間妾形氣』論―「お春」像を巡って―

『近世説美少年録』論

―巻之二十―巻之三十における勇婦・挿絵について―芦田貴子

『日本永代蔵』考―主題を巡って―

『西鶴諸国はなし』の一考察―浪人を素材にした作品を中心に―

宣長の「道」試論―『玉勝間』を中心に―

『西鶴諸国はなし』考―三作品を中心に―

世間への未練を語る手紙―『万の文反古』巻二の三をめぐって―

『好色五人女』試論

櫻井杏映

杉山明日香

野尻優有子

増田知世

望月綾

栗井祐子

上野梨里

梅田未央

大石裕美

大嶽茜

大槻佳美

岡部直子

- 『西鶴織留』小論—作品に込めた娘への思い— 岡本久仁子
- 『伽婢子』小考—「牡丹灯籠」における翻案の手法—川北光佐子
- 『英草紙』について—「入話」に見る翻案の意図—小林真理
- 『江戸生艶気権焼』論—その人物表現について—後藤恵子
- 『雨月物語』考—作品に見る時間意識—阪部友香
- 『諸道徳耳世間猿』の一考察—主題と怪異性—佐藤美穂
- 芭蕉の紀行文考—その旅の目的を中心に—清由佳
- 『春雨物語』の一考察—「宮木が塚」の稿本の比較を通して—寺崎いずみ
- 秋成と鏡花—『雨月物語』と『高野聖』を中心に—中川智恵美
- 『東海道中膝栗毛』考—十返舎一九の様々な工夫—武藤安津子
- 『東海道中膝栗毛』試論—その作品に見る旅文化の変遷—山本恭子
- 『心中天の網島』考—おさんに込められた近松の女性観—一柳友希
- 『心中重井筒』と『心中天の網島』における女性像—及川裕子
- 妻と遊女という関係性—
- 『冥途の飛脚』と『傾城三度笠』における忠兵衛像—田中架苗
- 『心中天の網島』論—「女同士の義理」が描かれた背景—
- 『女殺油地獄』小考—お吉殺しの場について—中埜文美子
- 『男色大鑑』考—「情に沈む鸚鵡盃」の位置—松田真菜美
- 『大経師昔暦』論—恨まないおさん像—山内のぞみ
- 絵本「桃太郎」考—近代—高坂史
- 菊池寛の児童文学—雑誌『赤い鳥』を中心に—浅野由夏
- 太宰治「水仙」論—〈天才〉という視点から—安宅郁子
- 与謝野晶子の短編童話—その特徴から分かること—足立七海
- 車谷長吉と私小説—池上理絵
- 幻想文学としての「夢十夜」—池田桃子
- 円地文子『女坂』—家に生きた主人公倫の生涯—小熊佳那子
- 『人間失格』論—〈道化〉論を中心に—河内亜也子
- 村上春樹『ノルウェイの森』論—三島由紀夫『春の雪』との比較検討—木野山華子
- 『義血侠血』論—芸人・白糸を通じて—栗島香織
- 『美しい星』論—人間たちの物語—後藤純子
- 「坊ちゃん」現象—舞台松山市が受ける影響—後藤渚美子
- 太宰治の罪の意識—『駆込み訴へ』を中心に—斉藤久美子
- 太宰治『お伽草紙』論—「浦島さん」の考察—坂本こころ

幸田文『きもの』論

白木 香朱美

谷崎潤一郎「金色の死」論—美の体現と認識—

直原 美香

芥川龍之介と『今昔物語』—「六の宮の姫君」で描きたかったこと—

瀬戸 幹子

辻邦生『安土往還記』—語り手「私」を中心に—

園田 倫美

谷崎潤一郎「秘密」論—都会の〈秘密〉—

田中 伸布子

三島由紀夫作品における切腹—『憂国』・『愛の処刑』を中心に—

塚本 恵美

三島由紀夫『春の雪』論—禁忌の恋と清顕と聡子を取り巻く人々—

辻 佳央子

『人間失格』における「信頼」の問題

土出 祐香有

横溝正史の「ウチ」と「ソト」との関係性

—『本陣殺人事件』と『獄門島』を中心に—

堤 麻衣子

川端康成「古都」論—名所案内記的要素の検討—

中川 理恵

五木寛之—『奇妙な味の物語』—

中西 美穂子

「桜の森の満開の下」論—〈桜〉と〈鬼〉の怪異をめぐって—

中西 若葉

川端康成「眠れる美女」論—眠りは何を表すのか—

西田 真美子

荷風の女性観—「つゆのあとさき」を中心に—

能勢 瑛美子

夏目漱石「彼岸過迄」論—須永の嫉妬の問題を中心に—

「二十四の瞳」論—家庭から学校へ—

橋本 愛美

佐藤春夫『美しき町』にみるウー・トピア観

濱口 由衣

—モリスとの比較を中心に—

早川 重

母に対する思いから見る谷崎潤一郎の女性観

原口 あずさ

夏目漱石「吾輩は猫である」論—〈猫〉の進化と女性観—

松谷 美樹

近代のお嬢さん—「お嬢さん」と平塚らいてう—

「芸術家」の「死」—佐藤春夫『F・O・U』と谷崎潤一郎『金色の死』—

丸山 佳織

「桃太郎」論—芥川の〈超人〉論—

柳原 加奈

「春琴抄」に見える〈美しい物語〉

山内 千恵

「杜子春」論—母の愛を中心に—

山下 沙紀

「和太郎さんと牛」論

山下 智子

「注文の多い料理店」

上原 かおり

「雪渡り」研究—トシを中心に見る賢治童話、光の世界—

大村 佑果

樋口一葉「わかれ道」論—お京の人物像に迫る—

小澤 映吏子

「やまなし」論—「クラムボン」という存在とその役割

北村 幸穂

樋口一葉「わかれ道」論—お京の人物像に迫る—

北村 幸穂

「やまなし」論—「クラムボン」という存在とその役割

北村 幸穂

「貝の火」―その由来と成立の背景―

桑原直子

樋口一葉「別れ霜」論―「芳之助」の死について―

降旗美菜子

新美南吉「手袋を買ひに」論

澤井麻妃子

尾形亀之助論

脇真由美

―狐と人間の問題を中心に―

庄野薫

「セロ弾きのゴーシュ」再考

丸尾京子

椋文学における〈死〉の描写―その方法と役割―

椋村真帆

漢文

蘆田益子

「行人」論―主題の追究―

瀬川公美子

浦島子伝について

上野絢子

「うた時計」論

高橋彩

森鷗外『還東日乗』について―「涙門を過ぐ」―

草野奈津子

「グスコ―ブドリの伝記」論

立本沙耶

源氏物語と白居易―帯木三帖について―

武田聖子

「ポラーノの広場」論―山猫博士を中心に―

田中千里

『源氏物語』賢木巻の政治的背景

林佑希子

「大根の葉」における健の母親像―壺井栄文学の中での意味―

中山真由美

菅原道真と白居易の漢詩―老荘思想の受容の違い―

富士元千晶

「浮雲」お勢に関する考察

西村由子

『源氏物語』における「李夫人」・「長恨歌」の受容

高橋典子

幸田文「流れる」論―結末における梨花の選択についての考察―

濱岸雅子

国語学

浅田絵梨

「手袋を買ひに」論―新美南吉と『赤い鳥』―

湯浅宗枝

現代語における「的」の新用法

若者語「やばい」―教師と生徒の用法の違いを中心に―

稲垣朋恵

中原中也と〈言葉〉―「汚れつちまつた悲しみに……」より―

近藤まゆみ

「きく(聞)」の意味変化について

―「とう」「たずねる」とのかかわりから―

開澤亮子

尾崎翠「第七官界彷徨」論―町子の「ひとつの恋」と「第七官界」―

藤井裕子

年齢層による岐阜県方言の使用実態

神田梨沙

遠藤周作「海と毒薬」論―「海と毒薬」における女性たち―

神田梨沙

遠藤周作「海と毒薬」論―「海と毒薬」における女性たち―

神田梨沙

年齢層による岐阜県方言の使用実態

神田梨沙

狂言台本における山伏の呪文

木村 ちひろ

北岡 深雪

香川県におけるあいさつことば

小谷 智美

桃山町方言の現在と未来

田口 莉枝子

「全然」の用法の変遷―否定用法と肯定用法―

下山 友梨

三木市の方言―方言の衰退と共通語化―

福田 麻美

幼児のオノマトペについて

杉原 友

鹿児島市方言の動態―助動詞・助詞・「ラーフル」における―

吉永 真紀

―保育所・幼稚園における実態調査を通して―

杉原 友

宇和島市方言の継承と衰退―現在の使用状況をもとに―

岡本 真季

高知県方言の文末表現における男女差について

辻 阿音夢

愛知県田原市方言の動向

都築 真侑

和歌山方言における動詞語彙

新田 倫子

高岡市方言の現状―アンケート調査による―

越前 有紀

日常会話と漫才の会話との表現法の比較

前田 瑠圭子

省略語にみる地域性

大江 美幸

世代間による鹿児島方言の使用実態

満園 沙耶

舞鶴市の方言の現状―高校生へのアンケート調査をもとに―

大槻 裕美

奈良県十津川村における終助詞の位相差について

米田 悦子

若者言葉と日本語の乱れ

岡田 美紅

石川県の罵倒語「ダラ」

橋爪 聡子

愛媛県西条市における「現存する方言」と

北田 真佑美

山口県の方言文末詞（終助詞）「ソ」について

林 明子

「消えゆく方言」について

井上ひさし『天保十二年のシェイクスピア』の

木徳 英莉

慣用表現「目に物言わず」の考察

松林 麻耶

表現についての考察

亀岡市の方言と教育―亀岡の教師の方言意識とそのゆくえ―

野際 陽子

「やるせない」考―明治以降現代における意味・用法―

廣政 愛

若者ことばの移り変わり

三宅 絵里

源氏物語における形容詞「うし」と「つらし」

中尾 桃子

亀岡市の方言と教育―亀岡の教師の方言意識とそのゆくえ―

野際 陽子

推量辞「むず」と「むとす」の用法

赤野 恵

亀岡市の方言と教育―亀岡の教師の方言意識とそのゆくえ―

三宅 絵里

―平安文学における用法と認識のされ方―

赤野 恵

亀岡市の方言と教育―亀岡の教師の方言意識とそのゆくえ―

三宅 絵里

『御伽草子』における禁止表現について

片山 陽子

亀岡市の方言と教育―亀岡の教師の方言意識とそのゆくえ―

三宅 絵里

カタカナ語の現状と未来―問題点とこれからの関わり―

片山 陽子

若者ことばの移り変わり

三宅 絵里

## 『女子大國文』投稿規定

### 一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

### 二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

### 三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

### 四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたものでも可)。
- ② ワードプロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)

と、投稿原稿が収められているフロッピーディスク一枚(ワードプロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワードプロソフト名を明記すること)。

### 五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括って記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはしない。

### 六、(投稿先)

投稿先は以下の通り。

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地  
京都女子大学国文学会

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、(掲載論文の電子媒体による公開)

掲載された論文等は、電子媒体によっても公開する。

十一、(規程の改正)

- ①本規程の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ②規程の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

編集後記

今号の査読・編集委員は次の方々です。

八木意知男・田上 稔・山崎ゆみ

以上の各氏に、編集事務局から坂本信道が加わって編集委員会を開き、査読の結果を報告、審議の結果、三点の論文が掲載となりました。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。(坂本)

# 女子大國文

第四百十一号

平成十九年九月十五日 印刷  
平成十九年九月三十日 発行

〒六〇五八五〇二 京都市東山区今熊野北日吉町三番地

編輯兼  
発行者

京都女子大学国文学会

電話 〇七五・五三・一九〇七六

FAX 〇七五・五三・一九一二〇

振替 〇二〇八〇一五・三二四

〒六〇二八四 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所

西村印刷株式会社

電話 〇七五・四一・四一〇八代

FAX 〇七五・四三・一六二八二